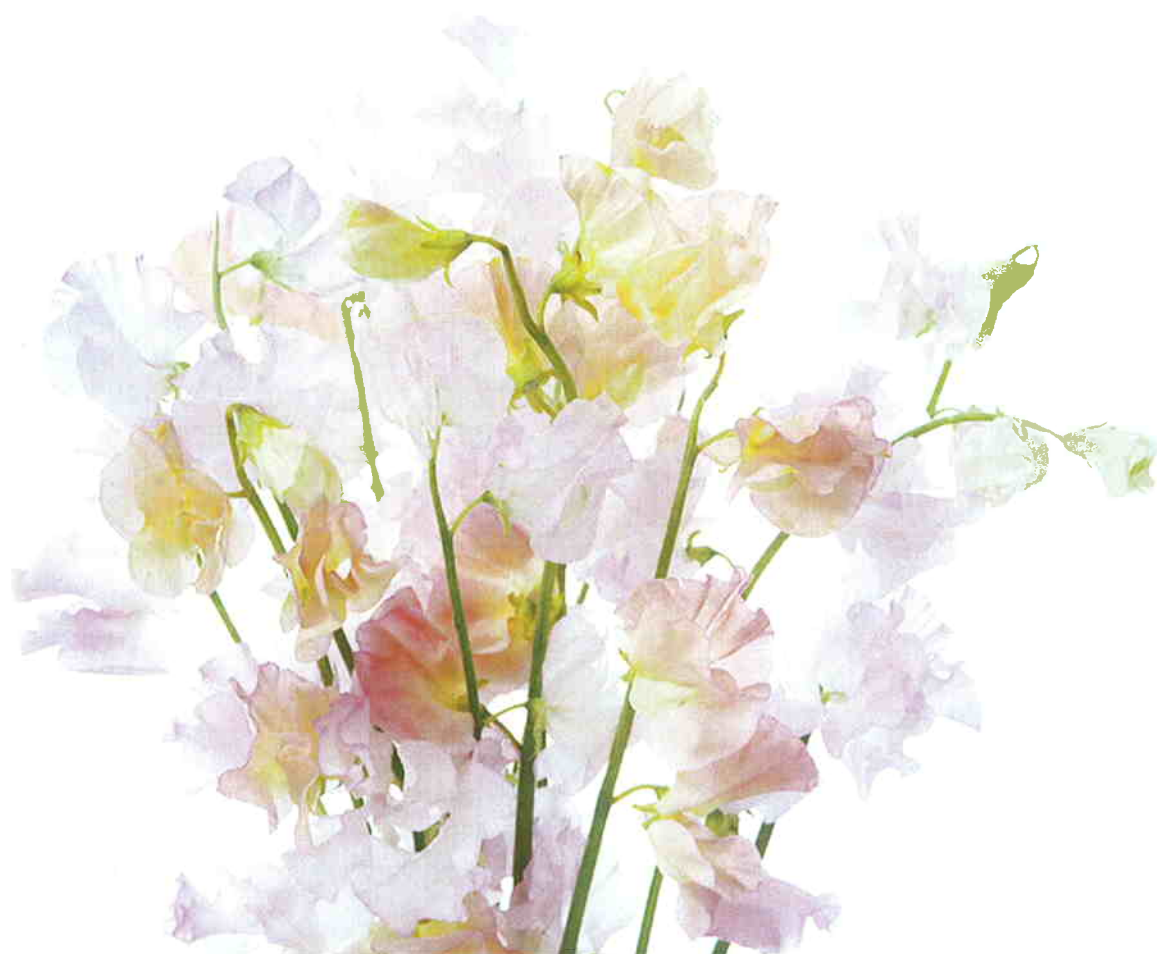

倶楽部 -Kounotori 2008.5.1 vol.21

倶楽部 <

発行人：吉川文彦
編集：こうのとり和歌宮



HEART to HEART

「それぞれの挑戦」

2007 年度こうのとり外来の成績

編集後記



HEART to HEART

「それぞれの挑戦」

Mさんご夫妻のお話し

A子さん

夫と私が出会って結婚したのは平成元年のことでした。その当時は共働きで、会議やセミナーなどで遠くまで出張を命じられることも多く、すれ違いの生活で、なかなか妊娠しない状態が気にはなっていました。羞恥心もあって病院の門をくぐれずにいました。どうしたら妊娠できるのか情報を集め、基礎体温をつけ、食生活に気をつけ、積極的に体を動かしたり、体質に合わせた漢方薬を服用したりの小さな、そして自分たちで出来る努力を続け、平成四年に自然妊娠し、稽留流産をしました。それから本格的に不妊治療に突入することになり、何回も続けた体外受精の成果で再び妊娠、しかし残念ながら再び稽留流産を経験しました。その後、再び、治療を再開し、現在に至っています。幾つかの施設を経て、何人かの先生に治療をしていただき、最後にたどり着いたのがここ、諏訪マタニティーです。

現在、我が国では他の先進諸国と同様、あらゆる部分でレバレッジ増大の大きなツケが廻り、環境破壊、少子高齢化が進み、一気に多くの社会問題が噴出し、少ない人口、少ないお金、少ないエネルギー、全てが縮小規模の中で社会を成り立たせなければならなくなりました。私たちが関わっている不妊治療、この治療費をめぐっても様々な議論がなされ、技術を提供する先生方は今までよりも質が高く、手間のかかることをより安価に提供することで、毎年一兆円も増えている国民医療費を抑制しようと必死になっただけです。生殖補助医療に係わる管理は最先端の設備を整えないと行えないので、当然その恩恵を受ける私たちが支払う治療費に反映されるのですが、施設ごとの差、地方と都市の差、周期におけるプログラムの差など色々な条件から金額は大きく開きます。また、私たちが受ける時間的な消失、精神的な負担もどの施設を選ぶかによって大きく変わってきます。

諏訪マタニティーは私たちが今までに訪ねたどの施設よりも治療費がかからないというのが現実で、プログラムも良く工夫しているなどと言うのが感想です。最初に時間をかけてきちんとした説明があり、定期的に勉強会が催され、院内の至る所にパンフレットが置いてあり、TV放送の合間に過去の治療成績や治療の説明が流れ、治療に関しての情報を仕入れるチャンスに恵まれています。またカウンセリングルームもあり精神的なサポートもしていただき、通院するために消失する時間や精神的負担も今までとは違って変わって、少なくなりました。

私たち夫婦が別の施設で治療を開始した頃は、まだ出来高払いで、使った薬や行ったことなどを積み重ねる形で診療報酬が支払われていたこともあり、多数の検査（血圧や心拍数から卵管通気、卵管造影）、大量の投薬（医師に対し「人工授精の後、嘔吐してお腹が痛みます。」と訴えただけで、ムコスタやガスターなどの胃薬からブスコパン、抗不安薬まで出て、全部飲むべきか悩んだことがあります）、謝礼の強要（先生本人から直接ではなく、周りのスタッフの方から「お世話になっているのだからお中元、お歳暮ぐらいはした方がいいんじゃない？」と要求される）を受けたため、人工授精なのにかえって、体外受精よりも多くの時間的、金銭的コストが、かかっていました。ほとんど毎日病院通いでいたから。体外受精はかなり早くから希望していましたが、受診していた先のある病院では、「医師会（先生は産婦人科学会と言いたかったのかもしれませんが…）が定めたガイドラインでは、あなた方夫婦は適用にならない。いつとは言わないが（自然妊娠したこともあってか）うちで人工授精を続けていればいつかは必ず妊娠する。」と、次のステップに進むことを事実上拒否されたこともありました。病院に出入りしている業者の利益追求によると思われる、様々な不妊ビジネスの接触も幾つか経験したことがあります。サプリメントや健康器具販売、化粧品やエステティック、はては養子縁組の斡旋です。殆どはお話だけ行って断ったものが多いのですが、いくら睡眠をきちんと取っても、もともと私は基礎体温がきれいな二層性のグラフにならず、医師から「使っている基礎体温計に問題がある」と何本も種類の違う病院の基礎体温計と体温表をセットで買わされたこともあります。養子縁組は実母様の気持ちよりも、斡旋に係わる人たちや医師への寄付（「ビジネスとして行っているのが無料ではないが、非常識な金額ではない」などと説明）のことを強調されたので夫と共に悩みました。医療人や医学研究者の世界には、一般の社会と異なる特殊事情が存在することを学んだこともあります。夫は職場で私の不妊治療のことについて触れられ苦しい思いをしたみたいで、研究のための情報の共有化と守秘義務の狭間で医師が患者の情報をどのように扱うかまだまだ整備されるのには時間が必要だと思いました。周りの人の薦めもあってアメリカの施設での治療を選択したときには、一回目の採卵の後、提供卵子プログラムを実行した日本人の医師夫婦の写真を数枚見せられ、「この技術で彼らは子供を持つことが出来たんだ」と直ぐに提供卵子と代理母によるプログラムを紹介されました。最先端の技術をファーストフードを食べるときの様に、時間をかけずに実行していく文化の恐ろしさ（もちろん効率が良いことで幸せになることもあります。が…）、最先端の技術の選択を可能にすることは、つらい決断を強いることでもあり、もしかしたら幸せになる別の可能性を駄目にしてしまうことでもあるのだとしみじみと思いました。

こうした不妊治療で嫌な思いをするたびに施設を替えて

きた私達ですが、諏訪マタニティーに通っている平成 16 年から平成 17 年の間に大きなトラブルに巻き込まれました。実家が小さな会社をしていますが、その取引先の一つの会社が破産してしまったのです。年を取り体の弱っている両親に変わり、夫と私はその処理をまかされ、弁護士に相談したり、本来の仕事の合間に、システムの復旧を試みたり、破産管財人に手紙を書いたりしました。その時に相手側弁護士の何気ない言葉（「破産した会社の社長さんは精神的に追いつめられています。奥さんは 3 人のお子さんを抱え途方に暮れています。貴女はお子さんがいらっしゃらないからわからないでしょう。貴女が年を取った時に支えてくれるのは、この人たちの 3 人のお子さん達の世代です。」）はエコーのように何回も私の心の中で響きました。私達夫婦の不妊は今現在、そして将来において社会に迷惑をかけていくものなのか…？その後、この会社の破産は医療制度改革による環境変化にうまく適応出来なかったこともあるけれど、それ以外に、お付き合いしていた人の話から奥さんのクレジットによる派手な生活のツケがきていたことも大きな要因であったことを知りました。子供が 3 人もいるということで手厚く保護され、税金さえも払っていない…。この国は子供がいれば簡単に責任逃れが出来るのか？テロや自分の意に沿わぬ者への無責任ないじめや複雑な事情に対応する思考力の欠如はこういった土壌から育ってきているような気がしてなりません。

両親から依頼された処理もほぼ終わりかけた頃、心と体に変調をきたしていることを自覚した私は諏訪マタニティーのカウンセリングルームで手厚いケアをしていただきました。心の中で起こっているクライシスを、吉川先生やカウンセリングルームの渡辺先生、そしてスタッフの皆様にとどのような言葉で表現したのか今となっては、はっきり思い出せません。それだけいろんなことが重なって、心にダメージを受けて混沌としていたのですが、カウンセリングを受けた後、少しづつですが体の調子が良くなっていったのを記憶しています。今にしてみると「もうすぐ閉経がやってくる。今までの努力はいったい何だったのか。」…そういう言葉で表現される、やり切れなさだったような気がします。今まで養子縁組の話や治療方法の押しつけなどパターナリズムの強い施設を経験していた私は、諏訪マタニティーでお話を聞いているうちに自分自身の意志の確立の重要性に気づきました。

=== 私自身の体のことなのだから生理がいつ終わってしまうかなんて誰にもわからないのだ。ましてや治療の方法や治療をいつまで続けるのかは私が決めることなのだ。===

最近忙しいにもかかわらず、夫と一緒にいる時間が増えてきました。二人で向かい合って勉強してる時なんかは、何も言わなくても楽しいのです。夫を生んで育ててくれた

両親にも感謝をしています。しかしそれと同時に一人息子である夫の生家を絶家させてしまっては…と悩んでいるのも事実です。それに対して夫の言葉は、「絶家はたいした問題ではない。二人で他者への共感と柔軟性を持って生きてゆけたら…」と言います。これからも二人で悩みながら、話し合いながら治療を続けていくのでしょうか、長い年月の治療がかけがえのない財産を与えてくれているような気がしてなりません。

T 男さん

私たちは県外から治療に来ています。

県境の長い長いトンネル（恵那トンネル）を越えてここに来ています。

この恵那トンネルはとても長いのですが、車を走らせると必ず出口に到達します。

しかし、不妊治療に関しては、何時になったら出口に到達するのか、そもそも出口があるのかさえ不明です。

不妊症の患者はこういった不安心理にさいなまれます。

不妊症に関しては施設及び医師の選択がとても大事だと思います。

SMC（吉川先生）がベストであると言い切ることは私には出来ません。なぜならば、私たち夫婦は世界中の全ての不妊治療施設に行ったわけではありませんから。

しかし、ベターであると言うことは出来ます。国内各地の多くの施設および海外（カリフォルニア）の施設に私たちは行きましたので。

私たちにとって良くなかった施設はどの点が良くなかったのでしょうか？

高齢者を門前払いする施設がありました。高齢者を排除することによって妊娠率を上げようという考えなのでしょう。十分な説明をしてくれず、質問をすると怒り出す医師もいました。勉強不足なのでは？と感じられました。

患者を実験台としか見てない医師もいました。

「赤ちゃん製造工場」といった雰囲気のある施設もありました。

夫婦一緒に診察室に入れない施設もありました。私は不安な気持ちの元に待合室で待たなければなりませんでした。

吉川先生は、妊娠判定で駄目だったときは、とても残念そうな顔をされます。

質問をしたら的確に回答してくださいます。我々は納得できました。

今のところ結果はでていませんが、絶望的な気分ではありません。

それは、根津先生、吉川先生、そしてその他のスタッフの皆様によるアドバイス、励まし、叱咤のおかげだと思います。

何時になったら出口に到達するのか、そもそも出口があるのかさえ不明ですが、あきらめずに前進し続けます。



HEART to HEART

Kさんのお話し

私は1県に住む44才、教員です。これまでの20年、ただひたすら仕事にエネルギーを使ってきました。結婚して10年「そのうち子どももできるだろう」と自分勝手に思い真剣に向き合ってきました。妊娠を侮っていました。

43才の時、近所の1産婦人科を受診しそこで開かれている「不妊学級」に参加しました。始まる時刻ぎりぎりに着いた私は最前列の席に座り、しばらくするとそこに院長先生が入ってこられました。先生は私の顔を見たあと（私にはそう思えたのです）開口一番「ここで出産した人の最高齢は42才です。」と言われたのです。その院長の言葉に、ショック以上の怒りがこみあげ、あとの話などはほとんど耳に入りませんでした。説明はNHKの「生命の神秘」という映像を見たあと、数枚のプリント（医学雑誌からの抜粋のようなもの）に書いてある医学用語ばかりの難しい説明で理解できませんでした。その日からインターネットで「不妊治療」を検索し、不妊のことと病院探しに没頭しました。そんな時、向井亜紀さんの記者会見をテレビで見たのです。向井さんの切実さが私の胸に迫り、私を次への行動へと導いてくれました。これも後から思うと不思議な縁です。もし、1産婦人科であのような説明を受けていなかったらそのまま過院していたに違いありません。また、もしこの会見を見なかったら諏訪マタを知ることもなく今の現実はありませんでした。次に根津先生を検索し諏訪マタのHPを見ました。厳しいコメントもありましたが、根津先生の治療に向かう姿勢が伝わり、ここには他にはない何かがあると直感し「転院するならここだ！」心を決めました。

初めての診察の日、ホームページで根津先生が書かれていることを読んでいたので「もしかしたら、あなたの年齢ではもう無理。妊娠できたとしても、生まれてくる子どもが可愛そうだから治療はしません。」と言われたらどうしよう。そんなこと言われたら私は絶対に立ち直れないと思い、夫と母と一緒に来てもらいました。

内診後「では、まず検査から始めます」と伝えられ、「私はここで治療を受けられるんだ」とほっと胸をなで下ろしました。帰りの電車の中の私は、来るときとは全く違う心持ちで、まるでもう妊娠したとも言われたような、明るく希望に満ちた思いでした。その後2回の体外受精・胚移植に挑戦し2度とも撃沈しましたがその2度で感じたことを書きます。吉川先生がお忙しいことは漠然とは知っていましたが、採卵・胚移植を体験してみて、いかに先生がご自身の時間のほとんどを私たち患者のために使ってください

ているの分かりました。外来の診察は8時30分に始まりますが、実はその前に先生は一仕事どころか二つも三つもしていたのです。採卵の手術は7時から始まります。ということは7時前にすでに先生は病院に来ているわけです。採卵は1件だけではありません。日によって違うのですが、5件位あるようです。（多いときにはもっとらしい・・・）そして午前中の外来が始まります。先生の机にはカルテが山になっています。山脈といった方がいいかもしれません。大変な数の患者さんを診察なさったあと、昼ごろから胚移植です。これも日によって違うようですが、少なくはないでしょう。休む間もなく、午後は入院されている患者さんの回診です。夕方6時半からは月2回の不妊治療についての説明会です。大きな広間に50名くらいの方が集まって治療についての詳しい説明があります。先生は休みなく、椅子に座ることもなく凄まじいほどの熱意をもって2時間通してお話ししてくださいます。

診察室の先生の様子ですが、初めは、緊張感が漂ってなかなか質問するタイミングを失ったり、指示を聞いたはずなのに診察室のドアを出た瞬間にすべて忘れてしまい、処置室の看護師さんにもう一度確認して頂いたこともありましたが、でも、初めての体外受精・胚移植をして2週間後の妊娠判定を聞きに来て、「Kさん、ごめんね。妊娠してなかったわ」と言われたときとても辛い内容でありましたが、私一人が辛いとは感じませんでした。先生が日々私たち患者のために「なんとかしよう」「なんとかしてあげたい」と身を粉にして力の限りを尽くして下さっているのを知っているからです。先生も共に私たちのこの辛さを背負って下さっていると感じました。

採卵の前日から胚移植までは諏訪に滞在しています。ゆくり過ごすことなどこれまでの人生でなかった私には、別な世界で生きているような感覚さえあります。決して金銭的に余裕があるわけではないのですが、往復の時間が体力消耗につながると思ったからです。

もし、この治療に取り組んでいなかったら、私は多くの方々に助けられて生きていることを知ることができず、感謝の念を抱くことなどなかったと思います。

自分の力だけでは何ともしようがない状況に追い込まれたことで、生まれればなし育ちばなしの自分のに気づくことが出来ました。

諏訪の町で出会う方々は本当に温かい方ばかりです。私が諏訪に宿泊しているとき、ちょっとした観光気分ですぐの中心をくまなく歩いていきました。そこで出逢った方達は惜しみなく私に愛情を注いでくれました。感謝をもってここにその一部を記します。

下諏訪駅通りにある「サロン諏訪」で500円の昼食を頂きます。地元に住むおばちゃんグループが近所のお年寄りのために運営していて、中にはいると必ずと言っていいほどおばあちゃんと相席になります（私もそれを望んでいるのですが）。「どこから来たの」から会話が始まり、時にこ

HEART to HEART



Sさんからのお話し

2006年9月、今年は吉川先生の夏期休診がやけに長く感じられる。次、卵が見えなかったら治療はもう辞めようか。それに小さく張り出して来た養子縁組のアンテナも収めて、もう全てを清算してしまおうか。そんな思いがぐるぐると巡っていた。その夜時計は、10時をとうに回っていたと思う。電話がなった。前日誕生日だった私に、神様は一日遅れで最高の贈り物を下さった。民間の養子縁組の関係者からの吉報だった。我が子Kとの縁(えにし)を告げるその一本の電話、私達夫婦の新しい人生が始まった。

結婚してから10年以上、“不妊の治療のために病院へ通いたい”この一言が夫に言い出せなかった私。諦めきれない気持ちを抑えて抑えて時が過ぎ、40歳を間近にしてやっと不妊治療の世界へ足を踏み込んだ。その後4年の間に5回の妊娠反応があったものの、それは数値上での妊娠に留まり命の尊さはかなさ、生かす事の難しさを身に染みて感じ考えさせられた。赤ちゃんをこの手に抱きたい、夢を現実にしたい、そんな切実な思いは理屈ではなく、私の子宮の奥深いところから湧き出てくる感情だった。しかし、年数を重ねるごとに卵の質も落ち、受精すらしない現実。自分の卵が出るうちはなんとか治療を継続しようという思いと、別のところで「里親・里子」についても一つの選択肢として自分の中に芽生えていった。

児童相談所で里親認定を受け、里親勉強会に参加した。小学生の子を月に一度預かる体験もさせて頂いたり養護施設のボランティアへも行った。民間の紹介機関へも足を運んだ。民間には幾つもの団体はあるものの、条件の設定が夫婦の年齢、性格、経済力と、審査項目は細かく厳しい。愛知や大阪方面の団体は私達に向いていないと判断した。とにかく私は動いた。必死に動いた。そして月日を費やした行動の全てがようやく繋がって、一つの窓が開いた。懐の深い素晴らしい紹介者と出逢う事が出来た。そちらには折に触れ電話をし、私自身の治療の状況や、いいご縁があったらとコンタクトを取り続けていった。

「大きな声で泣く元気なあかちゃんですよ」初めてKをこの手に抱いた時、とてもちっちゃくて愛らしい色白の、これは天使だ、そう思った。その時に私の胸の奥の止まっていた時計が確かに“カチツ”と音を立てて動き始めたのがわかった。赤ちゃんが欲しくて、出来なくて、肉体時間は流れていても心の時計が止まっていたのだと気づいた。Kを授かった効果は予想をはるかに超えたものだった。夫の両親を始め、元職場の仲間や友人知人、近隣のアパート

自分の身の上話をしてくださったり、私が諏訪マタに行っていることを話すと心配して下さいます。年齢を重ねてきた方がたの言葉は、ここまで生きてくるために大変なことがたくさんあっただけあって一言一言がとても重くそれでいて温かく心に届きました。

奏鳴館で聞かせていただくオルゴールの音色にも支えられました。体外受精の結果を待っているとき、妊娠判定がマイナスの結果となり、もっていき場のない想いで涙が止まらなかったとき、静かに流れるオルゴールの響きは木の箱を通して伝えられた温かな音によって震える心を癒し、私を丸ごと受けとめてくれました。

胚移植前の不安に心が揺れ動いてどうしようもなかったとき、春宮さんや秋宮さんの境内にある大木の根元で静かな時を過ごし心を見つめていると、「不安は頭の中にあり、不安という現実はない」「やるだけやって、あとは托身」という気持ちになりました。

酒屋さんの女将さんには不妊治療の辛さを共感していただき、同じ思いで涙することで心が晴れ、次への希望をいただきました。

女将さんから紹介して頂いた「児湯」の二階で出逢った茅野のおばあちゃんは、一人で来ている私に話しかけてくださり、みかんや漬け物もごちそうになり、心も体も温めて頂きました。

タクシーの運転手さんには、「私のところも諏訪マタさんにお世話になって子どもを授かったんです。あそこなら大丈夫ですよ」と励まされました。

駅近くのケーキ屋さんでは「どちらから？」と声をかけられたところから会話が始まり、諏訪マタにお世話になっていることを話すと、治療の大変さを共感して頂き、二人で涙し励まされました。

苔泉亭では、庭を眺めながらお茶をいただくたびに、自然の美しさ、時の移ろいやはかなさを感じ、心静かに過ごす時間の中で本当の自分の気持ちに向き合うことができました。

振り返ると、私は下諏訪の多くの方々に出逢い、たくさんの温かい心に触れることで、私に足りなかった「支えられて生きている」ことに気づかされ、「感謝の心」を育てて頂きました。「私が何とかする」という責任を担っていく心も大切ですが、私にとっては、生かされて生きていることに気づき、感謝の心をもつことが何より大切であると思わせて頂きました。

「結果は変えられないが、自分の内側の想いは変えられる」、
「やるだけやってあとは托身」この信条で治療に向かっていきます。心に湧き上がる問いに対する答えを見つけるために、そして本当に私がこの人生でやりたかったことを見つけられるように、真剣に自分に向き合っていきます。

挑戦最後の年。

の方々も「おめでとう、良かったね頑張って！」と言葉をかけて下さった。しかし私にとって一番うれしかったのは夫の劇的な変化だった。小さな子供と触れ合うこともなく夫婦2人の生活をしてきたため最初は消極的であった夫が、Kを抱いて一変した。泣きじゃくるKをあやすのは夫の方が断然上手。夜の3人でのお風呂タイムは家族を意識する格別の時。私は生む事は出来なかったけれどKの親になった。それをいつか必ずKに話す日がくる。子供は育てている私達の愛情を毎日毎日毎日毎日、確認しながら私達の子供になっていく。そこには何も嘘はない。裏切りもない。嘘の積み重ねは裏切りになるから、必ず告知をするように、そう紹介者からも言われている。いつかくるその日には、Kが納得するまでKの思いに答えていかねばと思っている。そしてKがどれだけの幸せを私達夫婦に与えてくれたのかも。

昔テレビのCMで流れていた小田和正さんの曲のフレーズを思い出す。

“あなたに、逢えて本当に良かった。うれしくて、うれしくて、言葉にできない。らーらーらーらーらーら”

心から、願って願って、願い続けて授かった我が息子Kがこれを書く私の横ですーすーと眠っている。そのいとおしい寝顔に涙が流れる。



治療成績

2007年1月～12月の治療成績

一般不妊 (IUI含む)		298
IVF	採卵	1,251
	移植	1,105
	妊娠	420

Q&Aのコーナー

(相談室ではこんなことを聞いてください)

相談室には、看護師、培養士、カウンセラーの3つの異なるスタッフが居ます。みなさんが不安や疑問に思うことについてお入り頂ければ、随時お答え致します。

看護師には

- ・薬の飲み方
- ・検査について
(性交後検査・子宮鏡・卵管造影)
- ・診察室での内容を再確認
- ・内臓症・筋腫のこと
- ・子宮内膜ポリープ
- ・今後の治療について
- ・ステップアップについて

培養士には

- ・IVFの説明会を聞いたが分からない所
- ・なぜ卵が採れなかったか
- ・なぜ受精しなかったか
- ・分割卵の状態
- ・凍結卵の状態
- ・胚細胞移植について
- ・移植後の生活の仕方
- ・顕微受精をした方がいいか
- ・人工授精について

カウンセラーには

- ・仕事との両立
- ・家族・夫婦間の問題
- ・治療への向かい合い
- ・気持ちの行き詰まり
- ・治療への不安

診察時間内なら、どなたでもご自由にお入り頂けます(15分程度)。ゆっくりお話しにになりたい方は予約しておでかけ下さい。

編集後記

中島 小学生の頃、本当に6年間は長く感じていましたが、年と共に時間の過ぎるのが早くて、相談室も今年で3年目になったと聞いた時は「えっ？もうそんなにたったの？！」と思う程あっという間に過ぎた気がします。先日生まれて初めて古いというものに行ってみました。去年までは運気が低迷していたようで、今年から3年間はあがると言われました。新しいことを始めるならこれからと言われました。時間はあっという間に過ぎるので、とりあえず今年は何か一つでも新しいことを始めてみようかと思いました。何をしようかな～。

保科 相談室に関わりを持たせてもらうようになってから4年が経ちました。最初は戸惑うことも多く硬くなっていましたが、今は多少柔らかくなったでしょうか？色々な方とお話しをさせて頂く中で、教わることや気付かせてもらうことも多かったように思います。これからもより身近に感じてもらえるように心がけていきたいと思っています。寒がりなので、なかなかこたつもしまえないですが、身体を動かしていきたいな～と思っています。まずは、なるべく歩くようにしないと…。

小林 相談室のスタッフで今までの倶楽部Kを振り返りました。5年前の立ち上げた時、3周年記念号それぞれの掲載写真を見た時、5年という月日をひしひしと感じました。自分ではあの頃と気持ちも姿も変わっていないと思っていましたが、イヤイヤ、すっかり5年の月日は流れていました。仕事をしていると振り返ることってあまりないですが、こうやって思い返しの時間を作るといろいろなことが思い出されます。うれしかった事、悲しかった事・・・etc。これも全て諏訪マタニティーに通って来てくださる方がいるからこそです。今までありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。

渡辺 2003年3月3日、こうのとりの相談室がオープンしました。今現在はここへ文章を載せている5人で担当しておりますが、振り返ってみたら9人ものスタッフが入れ替わりで関わりを持ってきました。どこの病院を手本にすることもなく、こうのとりの外来を受診された方々に「どんな相談室であつたらいいのか」ということを教えて頂き立ち上げた、まさに諏訪マタオリジナルの場所でありました。本当に多くの患者さんにご利用頂いたことで、今日の私達があると思っています。この倶楽部Kに掲載した原稿を中心として不妊治療現場での心のケアについて、本を出版するお話しを頂きました。皆さんに支えられてやってこれたこの相談室のことを一生懸命書かせて頂きます。

岡村 相談室が開設されて5周年になるんですね。私は相談室のメンバーになってまだ一年も経っていないのですが、IVFへのステップアップ時に相談室で患者さんとお会いしてきました。皆さんとの関わりの中で少しは変化したかなと感じることもなくはないのですが、まだまだ未熟者です。少しでも皆さんのお役に立てるように相談室のメンバーとしても培養士としてもレベルアップできる様に日々努力していきたいと思っています。

